

書 評 と 紹 介

岩本 勲著

『現代フランス政治過程 の研究 1981～1995』

評者：佐伯 哲朗

本書は、「政治過程とほぼ同時進行的に書き進めた」『フランス社会党政権の転換点』と『現代フランス政治の変貌』を底本とし、「ミッテラン大統領の統治過程が一応は完結した段階で、……もう一度、結果から逆に過程を見直して加筆訂正を行い」「14年間を鳥瞰する形で」まとめたものである。著者は本書で「フランス政治の諸事件とその経過をバランスよく記述する政治史の形をとらず、選挙や世論調査、また特筆すべき政治的事件を手掛かりにして、フランス政治の諸断面を解明する手法」をとっている。

本書は、次のような構成をとっている。

はじめに

序 章 現代フランス政治の激動

第1章 ミッテラン大統領の誕生と社会党内閣の成立

第2章 最初の予算

第3章 左翼の敗北と政府の政策転換 1982年統一県議会選挙

第4章 国有化政策

第5章 地方分権化政策

第6章 フランス共産党第24回大会

第7章 社会党の敗北とFNの進出 1986年国民議会選挙

第8章 コアピタシオン

第9章 「左翼中道」化路線を歩む大統領と社会党

第10章 混迷するフランス政治とヨーロッパ 1992年のフランス地方選挙、ドイツ州選挙、イタリア国会選挙

第11章 亀裂深めるフランス政治 1992年マーストリヒト条約批准レフェンダム

第12章 社会党政権の崩壊と右翼の回帰 1993年国民議会選挙

第13章 FNの陰りと労働運動活性化の兆し 1994年統一県議会選挙

第14章 依然として不安定な欧州政治 1994年欧州議会選挙と欧州主要国の選挙

第15章 危機にたつフランス民主主義 1995年フランス大統領選挙・市町村議会選挙

第16章 ネオ・ナチ台頭を許す社会的雰囲気

各章の内容を紹介するのは、本稿を概説的な叙述にしてしまい、また煩雑でもあるので、ここでは省略し、本書の基本的特徴をみておくことにしたい。

本書は、専門研究論文をまとめた単行書ではなく、かといって初歩的な入門書でもない。評論集に近いものと考えてよいだろう。

本書を構成する各章は、個々の対象についての政治評論とみてよい。対象はフランスの政治以外にも拡散している。各論の注に記されてい

る文献からわかるように、主に新聞記事にもとづいて叙述している。従って、本書全体を通しての一貫した視点なり方法は存在しないようである。本書の表題が「研究」となっているのも、序章の表題が漠然としているのも、本書が対象として多くのことを取り上げていることのあらわれであると考えられる。

フランスの現状分析としては、本書の刊行以前にも、研究書としては葉山滉『現代フランス経済論』（日本評論社、1991年）、概説書、評論集としては、渡邊啓貴『ミッテラン時代のフランス』（芦書房、1991年、増補版・1993年）、清水弟『フランスの憂鬱』（岩波書店、1992年）、長部重康『変貌するフランス ミッテランからシラクへ』（中央公論社、1995年）などの単行本が出版されている。それ故、扱う対象自体はこれまでに日本で紹介されているものであるが、本書なりに新聞記事を詳しく紹介している場合もある。

評論集としての本書の価値は、著者の視点にある。評者のみるところでは、著者は古典的なマルクス主義の立場に立って、左翼批判、議会制民主主義の危機、国民戦線などの問題を論じている。ただし、この視点も評論の個々の文脈におけるものにとどまり、本書全体の叙述に方法的に具体化されているものではないと評者には思われる。

本書の特徴としては、日本ではそれほど詳しく紹介されていないフランス共産党の動向を紹介している。その点についてはそれなりに評価できる。

さて次に、本書の表題になっている「政治過程」という用語について、言及しておきたい。著者は、207頁1行目のケースを除くと、「政治過程」という用語を政治学において常識的に使われる用語法とは違った意味で用いている。通常、政治学では政治過程とは、政策決定過程を

指すが、本書では、「政治過程」は、政治史（あるいは歴史過程）とでも表現すべき意味内容を指している。

また著者は、ヨーロッパ連合を理想郷樹立の第一歩であるかのようなプロパガンダを批判する文脈のなかで、「希望と現実、宣伝と真実をそれぞれ取り違えないこと」（237頁）を主張している。その限りにおいては、評者も全く同感である。ただし、そのことは本書の表題と中身との関係についてもあてはまると言えば皮肉がきつ過ぎるだろうか。本書は「政治過程」の「研究」なのだろうか。

なお蛇足ながら、評者が気付いた範囲で、誤記、誤植を指摘しておきたい。したがて（36頁、正しくは、したがって、以下同様）、taravail（173頁、travail）、ミッテンラン（211頁、ミッテラン）、キャンペー（213頁、キャンペーン）、キャンペーン（231頁、キャンペーン）、カロリグ王朝（233頁、カロリング王朝）、ならなかつた（233頁、ならなかつた）、ペテルスベルグ宣言（238頁、ペテルスブルク宣言）、80代の（248頁、80年代の）、赤字がが（249頁、赤字が）、ブリュセル（252頁、ブリュッセル）、Bash（346頁、Basch）、岸田英尚（378頁、竹田英尚）、中木康雄（378頁、中木康夫）、伊東るり（379頁、伊藤るり）、ビルボーム（379頁、ビルンボーム）。特に、人名についての誤まりは、著者の正確さの程度を示しているとも考えられる。

（岩本勲著『現代フランス政治過程の研究 1981～1995』晃洋書房、1997年2月、A5版、viii + 384頁、定価本体4600円）

（さへき・てつろう 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

杉村芳美著

『「良い仕事」の思想』

新しい仕事倫理のために』

評者：小関 隆志

1 はじめに

本書は、著者の前著『脱近代の労働観』（ミネルヴァ書房、1990年）に次ぐ、労働観をテーマとした最新作である。前著においては、著者は古代、中世、近代、脱近代に大きく時代区分し、それぞれの時代に支配的な労働観を「労苦」「奉仕」「製作」「遊戯」であると総括した。著者によれば、脱近代である現代は、普遍的な価値が見失われ、労働は個人の自由で気ままな「自己実現」の手段、即ち「遊戯」になっているが、脱近代社会には、個人の自由気ままを超える何らかの普遍的な価値、労働倫理を見出す必要がある、と主張した。本書は、こうした立場を基本的に継承したうえで、「個人主義」に対抗する労働倫理（＝「良い仕事」）を、過去の思想的潮流に一貫して見出そうとした点が特徴といえる。

2 本書の構成と内容

本書は次のような構成になっている。

第一部 ポスト勤勉社会と仕事意識

第一章 労働倫理は衰退したか

第二章 高度産業社会と労働倫理

第二部 「良い仕事」の思想

第三章 良い仕事と「善く生きること」

第四章 良い仕事と「善い行い」

第五章 良い仕事と芸術

第六章 良い仕事の概念

第三部 「新しい仕事倫理」の可能性

第七章 良い仕事と全体性

第八章 仕事におけるインテグリティ

第一部において著者は、日本においては第三次産業化の進展に伴い、かつて美德とされた勤勉の倫理は衰退しつつあり、それに代わって「労働を意味ある行為にしたいとする傾向」即ち「労働における自己実現」志向が強まったことを指摘する。著者によれば「自己実現的な労働は労働の中で『自己の絶対性』を主張する。それは労働の意味を自己の満足という観点から求める労働における快樂主義および個人主義である」が、彼は「自己実現の追求をいうものの多くは、勤勉倫理への反動として個人の楽しさやおもしろさの追求、少なくともそうした表現による自己実現の追求を強調するにとどまっている」ことから、「自己実現の労働は、倫理性を体現し得ない概念であるといわざるをえない」。これに対し、「『良い仕事』は、個人にとって望ましい仕事であるとともに、人間と社会にとって望ましい仕事でもある」という。

第二部では、「良い仕事」に関わる過去の西欧の思想の系譜をたどる。第三章では古代ギリシア、ローマの労働観を、第四章では中世ヨーロッパの労働観を、第五章では19～20世紀初期イギリスのウィリアム・モリスとエリック・ギルの思想を取り上げている。各時代において思想家たちが追求した望ましい労働のあり方はいずれも、「『自己』という枠を超える仕事の意味付けを見」出している、と著者はいう。

第三部では、第二部での労働観の歴史的考察をもとにして、「良い仕事」とは何かを検討している。第七章では、「職人仕事」の理想というものは確かに重要ではあるが、「人とモノの

枠組みだけで考えてはならない。仕事は個人の制作行為として自己完結するようなものではない」とし、「仕事の喜びや満足感が他者や普遍と結びついている」ことを強調する。A・マッキンタイアとN・ペラーの思想を検討して、労働による「共同善」「公共善」についての思索を深め、「公共的な貢献とは社会において意味のある活動を行なうことであり、また意味があると自分が信ずる活動を行なうこと（これがコーリングの意識だろう）なのである。このように、それ自体として意味のある仕事（すなわち良い仕事）は共同社会へのコミットメントと切り離せないだろう」と述べる。第八章では、結論として「良い仕事」の諸条件を10カ条にまとめている。

3 労働観の歴史

労働観の歴史の叙述は清水正徳『働くことの意味』（岩波新書、1982年）と対比すると分かりやすい。清水正徳は資本主義経済が支配的となる近代以降に主眼を置き、資本主義経済における労働疎外や物化・物神性とその克服に焦点を合わせている。清水自身の労働観は、合目的・自己対象的・自己実現的労働（自然に対する目的意識的な作用）と、アソシエーション的労働（人間の自由な連帯）である。

これに対し著者は、古代から現代に至る諸思想の中から、「良い仕事」の労働観を一貫した系譜として描き出している。この点が著者の「良い仕事」労働観の第一の特徴である。著者は、西洋古代、中世においても労働を積極的に肯定する思想が脈々と息づいていたことを論証する。著者は古代から現代に至る歴史を通観し、「仕事（労働）倫理とは、決して近代以降に特有のものでも、産業社会に固有のものでもない。望ましい仕事のあり方、仕事への望ましい態度についての信念や価値意識としては、どの社会

にも存在した」（223ページ）ことを主張する。この点で、例えば“古代ギリシア人は労働を消極的に捉えていた”という常識的な見方が覆される。

第二の特徴は、「職人仕事の理想」を引き合いに出しながら、自己実現的労働観やアソシエーション的労働観を絶対視せず、その先にあるものとして「良い仕事」の思想を位置付けていることである。著者は、個人を絶対視する「個人主義」を批判し、個人を超越する価値を労働において実現することの重要性を訴える。著者によれば、「自己実現」の思想は本質的に個人を超越した普遍的な価値、倫理には到達し得ないのであり、「自己実現」に欠落している価値として「共同生活や全体への貢献、善悪の問題や道徳との関わり、様々な領域への配慮と平衡、共同あるいは普遍的な価値への結びつきなどの要素」（212ページ）があるという。

4 いくつかの現実的課題

このように著者は、過去の思想をたどりながら、「良い仕事」という、個人の自己満足のレベルを超えた労働倫理が存在することの必要性を訴えている。価値やイデオロギーが相対化し、生の意味や労働の意味を見出し難い現代にあって、著者が労働の倫理を真正面から取り上げたことの意義はまことに大きい。評者なりに、著者の問題提起からいくつかの現実的課題、論点を引き出してみたい。

第一は、個人を超越した「共同善」「普遍的な価値」とは、一体何を意味するのかということである。単なる自己満足のための労働に終始するのではなく、労働者が自らの労働の成果が社会に貢献することをめざす、ということであるが、現実の社会は様々な対立的契機、矛盾、差異に満ちており、その中で何が「普遍」なのか、「共同善」は果たして存在しうるのかとい

う問題が生じる。著者は前著において「奉仕」と「隷属」の関係について語っている（前著第8章4節）が、下手をすれば「奉仕」が権力や資本への「隷属」になる恐れもある。無論、この点は本書でも随所で指摘されている。また、個人を超越した存在が常に「善」を体現しているとも限らない。「奉仕」や「良い仕事」であることの根拠を具体的に掘り下げて考えていく必要があるだろう。

第二は、個人がなぜ、いかにして労働倫理を志向するのか、ということである。著者は個人の欲求と労働倫理とを対立させて論じているが、倫理があくまでも個人の欲求から切り離されたところ（過去の伝統など）に存するとすれば、宗教者であればともかく、高いところから「...せねばならない」「...すべきである」などと呼びかけるだけでは、説得力に欠けるのではないか。著者も、「仕事の喜びや満足感が他者や普遍と結びついている」（186ページ）ことについて言及してはいるが、残念ながら個人に外在的な「倫理」と個人の欲求との関係についての議論が十分に展開されているようには見受けられない。宗教的動機に拠らないのであれば、人間は本来的に他者・社会への貢献によって自らの存在意義を確認しようとする存在であるという、人間存在の実態に基づいた観点からも考える必要があるだろう。

第三には、客観的情勢である。時代を超えて普遍的な「良い仕事」の思想が存在してきたことを認めつつも、他方でそれぞれの時代状況、社会的・宗教的・文化的背景によって異なる側面も否定できない。清水が叙述の中軸に据えていた労働疎外、物化・物神性の克服という課題は、資本主義経済に特有のものと言える。資本主義経済社会の下で「良い仕事」を実現しようとすれば、様々な困難にぶつかるであろう。著者は「われわれの実際の仕事が良い仕事である

ことはめったにないし、良い仕事であることがいかに困難であるかを思い知らされる。われわれの仕事は実際には、金銭を手に入れるためだけのものであったり、社会的な貢献とは無関係であったり、楽しさを微塵も感じさせなかったり、自分の能力が充分生かされていなかったりすることがほとんどであろう。.....しかし、このことは良い仕事が決して不可能であることを意味しない。そして、実際の仕事が良い仕事と無縁であることも意味しない。むしろ、良い仕事は現在の仕事とどこか別のところにあるのではなく、現在の仕事そのものの中にあるとさえ言えるかもしれない」（210ページ）と述べている。

5 「良い仕事」と労働運動

客観的情勢の中で「良い仕事」の実現可能性を探ろうとすれば、著者も指摘するように、単に個人の態度や心がけに還元してしまうのではなく、実態の分析や労働者の実践・運動に着目することによって、「良い仕事」実現の方途を展望していくことも一方では必要であるように思われる。

著者が世話人を務める「OWL（オリジナル・ワーキング・ライフ）仕事研究会」の活動は、本書あとがきに紹介されているが、この会には労働者が多数参加していることから、抽象的・観念的になりがちな労働倫理の問題を現実の具体的な事例に即して検証し、生きた倫理として鍛える場になり得ると思われる。

労働倫理の問題を扱う本書には、労働運動に関する論述は見られない。しかし評者の関心からすれば、「共同善」「公共善」という文脈での「良い仕事」の思想に、労働運動の視点を取り入れるとともに、労働運動にも「良い仕事」の思想を取り入れることが重要ではないかと考えられる。

「良い仕事」や「労働の社会的意義」と言っただけではやはり漠然とした感を拭えない。各産業・職場の置かれた諸条件に応じて、労働内容の改善や地域住民・消費者との協同・連帯などをどう実現していくのかを労働者が集団的に検討することによって、「良い仕事」が具体的な行動指針になり得るのではなかろうか。

他方、労働運動に、労働の社会的意義の視点を確立することが重要であるという指摘が、労働組合の産業政策闘争に関する議論などに見られる（例えば鎌倉孝夫「労働組合の主体形成と政策闘争」鎌倉孝夫・福田豊編『参加・創造・社会改革 労働組合の制度・政策闘争』ありえず書房、1985年。下山房雄「労働組合の産業政策闘争の意義 交通労働組合の交通政策闘争のために」『賃金と社会保障』1965号、1991年9月上旬号など）。日本労働者協同組合連合会でも7点の「よい仕事」原則を作っている

（内山哲朗「集団的自己雇用と集団的生活援助」富沢賢治他編著『労働者協同組合の新地平 社会的経済の現代的再生』日本経済評論社、1996年）。

上記の諸課題は専ら評者の関心によるものであるが、著者の描き出した「良い仕事」の思想系譜は、労働の社会的意義をめざす現代の労働組合運動を考察する上でも、労働倫理の必要性について思想史の見地から鋭い問題提起を行っており、大変示唆に富んでいるように思われる。

（杉村芳美著『「良い仕事」の思想 新しい仕事倫理のために』（中公新書）中央公論社、1997年10月、235ページ、定価700円+税）

（こせき・たかし 一橋大学大学院博士課程、法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）